# 粉河寺縁起絵巻考
## ―巻頭部の復原をめぐって―

塩出貴美子

### はじめに

和歌山県那賀郡の粉河寺には、十二世紀後半頃に製作されたと推定される一巻の縁起絵巻が伝存する。これは二話から成るもので、第一話は本尊千手観音像の造立譚、第二話はその利生譚である。本絵巻については、既に諸先学の論考があり、縁起の内容、説話集などに見られる漢文縁起との関係、構図および描法の特徴などが明らかにされている。[1] しかしながら、なお不明な問題もいくつか残されている。

その中で、本絵巻の理解を困難にしているものの一つに、罹災による巻頭部の焼損がある。[2] このため第一段の詞書と絵の一部は失われており、また現存する部分においても、画面の上下には、波線状の焼痕が、次第に小さくなりながらも巻末に至るまで続いている。現在の巻頭には、焼け残った断片が並べ合わされているが、料紙の連続性が辛うじて認められるのは第13片以降についてであり、それ以前の十二枚の断片の配列順序については、いささか疑問に思われる箇所がある。このような特殊事情により、本絵巻の冒頭部の内容は、現状からだけでは理解され得ないのである。

この焼損の問題について、注目すべき復原的考察をはじめに提出したのは清水義明氏である。[3] 清水氏は、本絵巻の特徴である同一背景の反復表現に着目し、これを利用して焼失部分の一部復原を試みるとともに、各断片の描写内容についても多くの重要な意見を出された。これにより、十二枚の断片はかなりの程度まで整理されることになり、もはや付加し得るものは何も無いかのように見える。しかし、それにもかかわらず、相互関係の不明な断片はまだ残っている。そこで、本稿では、この復原問題に敢えてもう一考を加えてみようと思う。

なお、本題にはいる前に、諸書に見える粉河寺縁起を通覧し、その問題点をまとめておくことにしたい。

### 一、「粉河寺縁起」の内容

粉河寺の縁起を語るものとして、これまでの研究で知られている資料は左記の通りである。

(1) 粉河寺大率都婆建立縁起（醍醐寺本『諸寺縁起集』）
(2) 粉河寺（『阿娑縛抄』諸寺略記上）
(3) 粉河寺縁起（宮内庁書陵部所蔵伏見宮家旧蔵本）
(4) 粉河寺（『伊呂波字類抄』十巻本）
(5) 粉河寺（『元亨釈書』巻第二十八）
(6) 紀州粉河寺（『甲子夜話』続編巻六十五）
(7) 粉河観音本縁事（『三国伝記』巻第二）

このうち最も高い資料的価値が認められているのは、天喜二年（一〇五四）に僧仁範によって起草されたという(1)である。(2)～(6)はいずれも(1)を基にして、その内容を略述したものと考えられるが、簡略化の程度はまちまちである。(4)は草創譚のみを語り、利生譚は含まない。逆に、(7)は草創譚がなく、利生譚一話のみである。(1)～(6)は漢文の縁起であるが、この(7)は訓読文であり、多くの潤色が施されている点で、他のものとは趣を異にする。また、(3)では、本絵巻と同容の内容をもつ漢文縁起の後に、和文体の利生譚三十三話が付加されている。

さて、まず(1)によりながら、縁起の内容を概観することにしよう。

紀伊国那賀郡の猟師大伴吼子古は、ある幽谷に踞木を定めて夜毎に猪鹿を狙っていたところ、放光所を見つけたので柴の庵を立てた。ここに精舎を建立し仏像を造立したいと思っていると、程なくして一人の童行者がやって来て寄宿を請うた。もてなすと、喜んだ行者は「もし願うことがあるならば助成しよう」と申し出た。そこで猟師が造仏のことを語ると、行者は承諾して七日間庵に籠った。八日目の朝、家の戸を叩く音を聞いて猟師が庵に行くと、皆金色の千手観音像があり、行者の姿は無かった。これ以後、猟師は殺生をやめ仏法に帰依した。専ら菩薩を慕い、唯一人帰依して他の人には知らせなかった（以上、本絵巻の第一話に相当）。また、河内国渋河郡馬馳市に佐大夫という者がいたが、その愛子は重病で、種々の加持祈禱も効験がなかった。ここに一人の童行者がやって来て寄宿を請い、佐大夫から子の病気のことを聞いて加持することを申し出た。行者が千手陀羅尼を唱えて加持すると病は治り、父母は喜んで多くの布施をしようとした。しかし、行者はこれを断わって鞘付帯一筋だけを受け取り、問われるままに「我は紀伊国那賀郡風市杜粉河という所に住む」と答えて去った。佐大夫は妻子眷属を引き連れて粉河を尋ねるが行き迷っていたところ、米粉を流したような白い川を見つけ、それを溯って林中の草堂に辿りついた。夜になったので人々は眠ったが、夜中に自然に火が点り、驚いて堂内を見ると、行者に奉った帯鞘刀（鞘付帯に同じか）を手に提げた皆金色の千手観音像が立っていた。行者は千手観音像の化身であった（以上、本絵巻の第二話に相当）。以下略。

右の内容を本絵巻の詞書と比較すると、いくつかの顕著な相違点があることに気づく。まず、(1)は漢文であるのに対し、詞書は和文である。第一話については、詞書は後半部しかないので全体の内容を比較することはできないが、現存する部分では、(1)が千手観音像のことを

「他人未知」と語るのに対し、詞書では猟師の妻をはじめ近隣の人々にも言い散らして皆帰依したという。また第二話については、詞書では病の子を河内国さらら郡の長者の娘とし、その病状を具体的に記述する。そして、長者の一行が粉河へ旅立つ時期を翌年の春に定めている。しかしより大きな相違は、(1)以下(2)(3)(5)(6)では長者の一行が観音堂の中でそうとは知らずに一度眠り、深更に至って自然に点った燈で千手観音像を発見するのに対し、詞書では庵の発見に引き続いて扉を開け、すぐに千手観音像を発見することである（(7)では堂はなく千手観音像は奇巌の上に立っていたという）。また、詞書の最後には「れうしが一家件の粉河の別当□いたれるまでなりきたるなり」という一文があるが、これに相当する内容は(1)～(7)の中には見当たらない。

このような相異があることから、本絵巻を(1)以下の漢文縁起に直接結びつけることには問題がある。この点について梅津次郎氏は、(1)によれば承平五年（九三五）以前に既に粉河寺に関する流来縁起があったこと、また正暦二年（九九一）十一月二十八日付太政官符（『粉河寺文書』）にも縁起の略述があることなどから、(1)以前にも縁起文が成立していた可能性があると考え、本絵巻の詞書は、現存の漢文縁起を超えて、今は失われた縁起文との関係において成立したものかもしれないと推論された。[4]

ところで、粉河寺縁起の資料は他にも二点が紹介されている。

(8) 粉河十一面観音（金沢文庫本『観音利益集』所収、書写年代は鎌倉時代末頃）

(9) 後白河法皇蓮華王院小千手堂中尊供養願文（資料(3)和文縁起第二十一所収）

(8)は近藤喜博氏によって紹介されたもので、[5]訓読文ではあるが、その内容は(1)以下の漢文縁起に大方は一致する。しかし、漢文縁起では第一話第二話ともに、たまたま寄宿した童行者に、家の主が造仏のことあるいは病子のことを語り、そこで依願する運びになっているのに対し、(8)にはいささか異なる展開が見られる。(8)では、十五六と見える「ケシタル童子」が「汝仏ヲ造ラムト云願アル由ヲ聞、実シカラハ我此願ヲハタシテアタウヘシ」と言ってやって来る。そして「先ノ光明ノ所ニ倶ニ行テ、イホリヲ結ヒタルニイタリヌ」となるのである。また同じく(8)の第二話に相当する部分では、童子は始めから「我心ミニ加持セムト思也」と言ってやって来る。ところが詞書のこの点を見ると、第一話は不明であるが、第二話では、童は「まことにやさぶらふらむ、このとのゝひめきみのよにいみじきやまひをしてしぬべくおはしますときこゆるは、ま□らは七日ばかりいのりまいらせ□」と言って来るのであり、漢文縁起から離れて、(8)と詞書の間に共通性が見い出されるのである。しかし、(8)は佐大夫の病子を「子息」とする点で詞書と異なるし、庵発見の過程についても(1)における展開を継承しているので、これを詞書に直接結びつけることはできない。

次に(9)は、本絵巻の製作背景に関する考察の中で大串純夫氏が紹介したものであるが、画面との直接的な関係において、これに注目したのは亀田孜氏である。[6] 亀田氏は、まず、現状の画面からは、猟師が庵を結ぶより以前に童行者の訪問が描かれていると解釈されるが、これは、(1)をはじめとする漢文縁起の展開順序とは相違すると考えられた。ところが、(9)では、猟徒は霊童に会って造像の趣を教えられ、その指示に従って山中の光耀の木を伐り、その木の下に庵を結ぶという展開になっており、これが現状の画面の展開に一致すると考えられたのである。しかしながら、現状の断片の順序には、はじめに述べたように疑問があるのであるから、亀田氏の説は検討を要するように思われる。

以上述べてきたように、粉河寺縁起の資料は比較的多数あるが、いずれにも本絵巻との直接的関係を認めることはできない。そこで、焼損した巻頭部については、縁起文に頼る前に、画面そのものの検討をすべきであろうと思う。

## 二、反復表現の検討

本絵巻の構図に見られる最も大きな特徴は、既に何度も指摘されてきたように、同一背景のくり返しが多いことである。これは、説話が一定の場所で進行する場合、その時間の推移を絵画化するために必要とされた手段であり、「信貴山縁起絵巻」や「吉備大臣入唐絵巻」をはじめとする縁起あるいは説話絵巻において、しばしば用いられた手法である。本絵巻では、料紙の連続する第13片以降を見ると、千手観音像の堂となる柴の庵がその周辺の風景とともに六回、第二話前半の話の舞台となるさらら郡の長者の館が三回、それぞれくり返されている。また、第一話で活躍する猟師の家は、全体が描かれるのは一回だけであるが、門の部分はその前にも登場している。

ところで、十二枚の断片の描写内容を見ると、幸いなことに、柴の庵の周辺風景や猟師の家に相当すると思われるものがある。そこで、以下ではこの点を手掛かりとして復原の考察を進めて行きたいのであるが、その前に、反復される内容とその描写の正確さの度合を検討しておく必要がある。それにはまず、画面の損傷の比較的少ない第二話から見ることにしよう。

第二話は三段で構成されており、長者の館は各段に一回ずつ、柴の庵は第三段の後半に三回連続して描かれる。長者の館は第一話には登場しないから、復原の考察には関係ないのであるが、本絵巻の反復表現の一例として概観しておくことにしたい。

第一段の長者の館は、深い濠を廻らした門前から始まり、立派な櫓門の中にはいると、母屋の他に馬屋などの別棟がある。その奥に、渡り廊でつながれた離れ屋があって、長者の病気の娘はここに横たわっている。第二段では、櫓門や母屋は省略されて、離れ屋に続く渡り廊から始まる。離れ屋の左方には、鉤形の網代垣をはさんで、前段には

なかった格子板壁造の倉がある。第三段は、第二段と同じく離れ屋と倉を描くが、倉の左横の木立ちの背後に、館と外との境界を示す板塀が描き添えられている。このうち、くり返し描かれる離れ屋と倉は、構図の取り方、建物の構造ともに、三段を通じてほぼ同じである。また、離れ屋の右横の柿の木、左横の二本の交叉する木立ち、それから倉の左横の三本の木立ちも、枝ぶりに多少の相違はあるが、同様にくり返されている。しかし、厳密に比較すると、建物の大きさは各段で異なっており、画面上の位置もいくらかずれている。さらに細部を見ると、渡り廊と離れ屋の接続箇所などに、微妙な相違を指摘することができる。従って、この反復表現は、「信貴山縁起絵巻」について推定されているような共通の下敷をもとにして描いたものではないことがわかる。(7) しかし、大略においては、正確なくり返しが行なわれていると言えるだろう。

次に、柴の庵を見ることにしよう（前から順にⅣ、Ⅴ、Ⅵとする）。柴の庵は藁葺の寄棟造で、正面に観音開きの扉がある。この扉はⅣ（図1の2）では閉じ、Ⅴ・Ⅵでは開いている。庵は常に正面から捉えられており、大きさはやや異なるが、その描写は三回を通じて殆ど同じである。しかし、Ⅵの屋根が他よりも扁平になったり、ⅤとⅥとでは奥壁の構造に違いがあるなど、細部に微妙な異同があることは、先に述べた長者の館の場合と同様である。

柴の庵は画面の中景にあたる位置に描かれており、その前には広い空間がある。これは、ここが説話の展開の場となるためである。そして、画面の上方と下方には、山中に建つ庵にふさわしい風景描写が、遠景と近景に分かれて互いに平行しながら展開している。

まず近景を通覧すると、一連の風景のように見えるが、これは庵の左右にある一組の同じ土手が三回くり返されたものである。庵の右方の土手の下には、Ⅳ・Ⅵでは、大きく変曲した流水がある。Ⅴではこの部分に焼損があって、流水の有無は不明であるが、まるで水を飲むかのように頭を垂れた馬がいることから、ここにも流水が描かれていたと推定される。土手の上には、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵを通じて、枝ぶりに共通性が認められる二本の木がある。このうち右の木は、上方が強く右に傾斜した特徴のある形態をしている。その幹の二股になった箇所には数本の横木が組まれているが、これは、第一話で猟師が鹿を狙う時に登っていたという踞木であり、柴の庵とともに本絵巻の重要なモチーフである。なお、Ⅳでは、この二本の木の右にもう一本、流水の上にほぼ水平に張り出した木があることが注目される。一方、庵の左方の土手にも大小数本の木立ちがあるが、こちらは三回それぞれで数も形態も異なっており、くり返しにこだわらない自由な表現がとられている。しかし、左端にS字形の切れ込みのある土手の形は、基本的には同じである。

では、遠景はどうであろうか。まず、庵の背後から右にかけては杉林があり、左後方には枝先を扇状に広げた樹木が数本ずつ立ち並ぶ。

そして、これら全体を包み込むような大きな山がある。その頂は画面の外にはみ出しているが、左右に広がる山裾の輪郭線が、これに連なる小さな山々とともに描かれているのである。以上はⅣ・Ⅴ・Ⅵに共通する描写である。ただし、Ⅴでは、杉林の右は薄墨の霞を描くだけの余白とし、山の右半分が省略されている。庵の背後のこの山の左には、杉林をはさんでもう一つの山があるが、この部分の描写には異同が多い。Ⅳでは、中央の山よりやや小さいがゆったりとした起伏のあるもので、その麓の中央には枝先の広がる二本の木が、稜線の左端には数本の松が描かれている。Ⅴでは、いくつかの山が重なり合いながら左方に展開して行き、そのままⅥの庵後方の山に連らなる。ここには松はなく、杉林や三角形の叢林が散在している。最後のⅥでは、山というよりは丘のようなゆるやかなものとなり、三角形の叢林が二箇所に描かれている。なおⅣでは、中央の山の右方にもゆるやかな起伏をもつ大きな山があり、麓の中央や山裾の左端に三角形の叢林と枝先を広げた木立ちの群れがあることに注目しておきたい（図1の1）。

以上のことから、第二話の柴の庵については、近景と遠景を含めて一つの景が構成され、これがくり返し描かれていることがわかる。一部の変更や細部の相違はあるものの、主要なモチーフについてはほぼ正確にくり返されているのである。では、第一話ではどうであろうか。第一話では、第13片と第14片が接続するところ（図3の3）、第二段のはじめ（図2）と最後の三箇所に柴の庵が描かれている（前から順にⅠ、Ⅱ、Ⅲとする。なおⅡについては、清水氏の復原案を妥当なものと認めて、第21片を引き抜き、第20・22片をつないで取り扱うことにする[8]）。

第一話においても、柴の庵を中心に近景と遠景が一体となって一つの景を構成することは、第二話と同様である。庵は、柱が太い木材になることを除けば、第二話のそれと全く同じである。しかし、近景にはかなりの相違が認められる。庵の右前には、第二話で見慣れた二本の木が踞木を添えて枝ぶりも同じに現れるが、幹の下方は霞に覆われており、土手は姿を見せない。一方の左前には、ⅠではS字形の土手が描かれているが、Ⅱ・Ⅲにはない。このあたりは焼損がはげしいので、あるいは焼け落ちた部分に描かれていた可能性があるが、いずれにせよ、ここには木立ちはなくそのかわりに萩とおぼしい花が咲き乱れている。これは、春の出来事である第二話においてはそれにふさわしい桜の花を描いたのに対し、第一話を秋と想定して、全体として春秋の対比を意図したものであろう。従って近景では、Ⅰ～Ⅵに通有のモチーフは庵の右前の二本の木と踞木だけということになる（Ⅲのこの部分には燃損があるため踞木は確認されないが、他から推定して、これが踞木を設けた木であることは疑いない）。しかし、第一話だけについて見ると、萩の花がくり返しの重要なモチーフになっている。また、Ⅱの第22片の左端、萩の枝先あたりに見えるものは、Ⅰ・Ⅲの庵の左前に放置されている木材と同じものであり、これもくり返しの

モチーフである。

次に遠景を見ると、焼損により寸断されてはいるが現存する部分には、第二話の遠景、特にⅣ（図1の2）のそれに近似する風景が認められる。樹木の種類や配置に多少の相違はあるものの、庵後方の杉林、木立ち、それらを包みこむような大きな山、そして左方に連なる山並、これらはいずれもⅠ～Ⅳに共通して描かれるものである。中でも特に、遠景の左端が常に特徴のある形をした松の並木を以て、余韻を残しながら終息することは注目される。この点でも、第二話のⅣ～Ⅵより第一話のⅠ～Ⅲの方が強い共通性をもつと言える。

以上のことから、第二話の描写内容とは異なる部分があるにしても、第一話においても、柴の庵は近景、遠景とともに一つの同じ景を構成しており、その全体がくり返し描かれていることがわかる。

ところで、Ⅲの前には、くり返しのモチーフの中には相当するもののない遠景が描かれている。ゆるやかな起伏をもついくつかの山が重なり合い、その所々に三角形の叢林と枝先を広げた木立ちがある。これは、Ⅳの遠景のところで指摘した右方の山に相当するものと思われ、ともに庵の立つ粉河の地への導入の役割を果たすものである。

さて、最後に第一話にあるもう一つの反復表現である猟師の家についてふれておきたい。これは、第一段の最後に門の部分だけが、また第二段の中ほどにその全容が描かれている。その共通する部分を見ると、門は冠木門の簡略なもので片折戸があり、左右は生垣でその前には小さな濠がある。門の中には一本の木があって、枝に藁のようなものが干してある。どちらの画面にも大きな焼損があるが、右の描写は共通して認められる。

以上述べてきたように、本絵巻の反復表現は、大略においては一致するが細部に微妙な相違がある場合が多く、共通の下敷を用いるというような厳密に正確なくり返しではない。その一部は、画面が単調に陥ることのないようにと加えられた積極的な変更であろうが、また一方では、描く対象ごとに自由に筆を走らせた結果として生じた相違でもあろう。しかし、いくつかの主要なモチーフをくり返すことによって、場所の同一性を示すことに成功しているのである。

## 三、巻頭部の復原案

完全に断片となったものは第1～12片と第21片の合計十三枚である。このうち第2・3片と第4～7片については、清水氏が既に妥当な復原案を発表されているので、ここでは省略する。[9] また第1片は白紙なので考察の対象から除外すると、問題として残されるのは第8～12片と第21片の六枚だけである。まず、この六枚の断片の内容を検討することから始めよう（図3の1・2参照）。

第8片　右上にはゆるやかな左下がりの列をなす三本の松がある。山を示す輪郭線は見えないが、これはⅠ～Ⅳの庵の景において遠景の

最後に描かれていた松と同じものであると思われる。その下に枝先を伸ばしているのは、Ⅰ～Ⅵに通有の踞木を設けた木である。二本のように見えるのは幹の下方を霞に覆われているからであり、根は一本であろう。その左にわずかに枝先だけを残している木とともに、庵の右前の風景を構成する重要なモチーフである。左上端には山の右裾が残るが、樹木は見えない。従って第8片には、庵の景の左端と右端の要素が共存していることになり、これは庵の景が二回連続して描かれた際にその転換点に位置したものであることが予想される。

第9片　近景に土手があり、根を接するように二本の木が立つ。右の木は半分焼失しているが幹の途中に踞木の端が出ていることから、これは庵の右前の風景に相当するものであることがわかる。ただし、土手が描かれていることと木が根元まで描かれている点は、第一話のⅠ～Ⅲよりも第二話のⅣ～Ⅵの描写に近いものである。左上の杉林は庵の右後方にあったそれであり、上方の山とその中腹の木立ちは庵の景の遠景の右部に相当するものと看做される。従って、第9片は庵の景の右部にあたるものであるが、ところが、右上端には右上がりの山裾の端が、また中景にも丘を示すらしいゆるやかな右上がりの輪郭線があり、この右方に別の風景があることを予想させる。しかし、これは庵の景とは思えないので、ひとまず粉河への導入部であると考えておきたい。以上のことから、第9片は、導入部を経て、ここから庵の景が始まるというところに相当するものと考えられる。なお、左端の中央あたりの焼け焦げて茶色くなったところに、もとは緑青が塗ってあったと思われる物象の端がわずかに見えるが、何であるかは不明である。

第10片　中景に、ここから左に向かって盛り上がる丘があり、幹の中間を霞に隠された五本の松が立つ。下方には土手があり、その脇を水が流れている。庵の景の中にはこれに相当する風景はないが、Ⅳの前に展開する粉河への導入部に類似が認められる。そこでは松は三本であり、霞もないが、丘の起伏や松の形態には共通性が強い。さらにその右には、桜など数本の木立ちがあって、土手の下に大きく弯曲した流水がある。これは、長者の一行が粉河を尋ねる際に目印としたもので、本絵巻の重要なモチーフの一つである。第10片の端に見える流水はこれを表したものであろう。従って第10片は、Ⅳの前に比較すると簡略化されてはいるが、粉河への導入の役割をもつ風景の一部に相当するものと思われる。

第11片　中景は小高い丘の左腹とそこに生える二本の木からなり、左の木はかなり左方に傾いている。丘の向こうには流水がある。遠景は左から続く山の裾の部分にあたり、その上には三角形の叢林がある。画面の下方には、丘を表すらしい輪郭線と小さな木が二本あり、その間に萩の花が少しばかり見える。また、断片の右下の縁に添うかのように太いタッチの墨線があり、この丘はもっと右に続くようである。断片の左端からは枝先が突き出し、その少し上には丘を表すらしい輪

郭線の端が二センチばかり見える。さらにその上には逆さになった五徳がある。五徳の周辺には淡墨で描かれた物象が認められるが、何であるかは不明である。

さて、第10片と同じく、このような風景は庵の景の中にはないから、ここでもう一度Ⅳの前の粉河への導入部を見ると、先述の三本の松のある丘の左端部分が第11片の中景に近似する。Ⅳの前には流水はないが、木の傾きや遠山の様子においても両者は共通性をもつ。Ⅳでは、踞木を設けた木の右にもう一本、流水の上にほぼ水平に枝を張り出した木があることを指摘しておいたが、この枝先と第11片の下方左端に見える枝先との間には強い相似性が認められる。以上のことから、Ⅳの踞木のある土手とその前の導入部の丘とをもう少し接近させたならば、多少の相違点はあるものの、第11片に近似する風景を作り出すことが可能であると考えられる。また、この点を考えるには第2・3片(図4)が参考となる。この二片は猟師が踞木の上から鹿を狙う場面を表すもので、鹿のいる位置は土手の下の流水の近くにあたると推定されている。[10] ここで、第2片の左端下方の枝先は踞木の右横の木のそれに、右端上方の枝先はⅣの庵の景の前の丘に立つ木のそれに相当するものと看做すことができる。ところで、焼損のはげしい第2片の下端には、丘の輪郭線までは認められないが、小さな木が描かれているのが辛うじて見える。これは第11片の下端の小さな木と同じものであると考えられ、Ⅳの前にはないけれども、第2・11片を通じて、庵の景の前の風景を構成するモチーフの一つであると考えてよいだろう。

第12片　近形にはS字形の土手とそこに咲き乱れる萩の花がある。その上に見える細い丸太の左端は、Ⅰ～Ⅲの庵の左前に放置されていた木材と同じものであろう。遠景にはゆるやかな起伏の山が重なり合い、右上に杉林、麓に枝先を広げた木立ちがある。右端には左下がりの山裾が数本あることから、この右方にも山が連らなっていることが予想される。左端にはⅠ～Ⅳの遠景の最後に現れる松が描かれている。以上のことから、第12片は庵の景の左部に相当するものであることがわかる。

第21片　近景にはS字形の土手と萩の花があり、第12片によく似た内容であるが、例の木材は見当たらない。遠景の山は一本の輪郭線で形作られた簡略なものだが、右端には左下がりの山裾の線があり、この右方にも山があることが予想される。麓の右方には数本の木立ちがあり、遠山の左端には松がある。このように第21片は第12片に共通する内容をもっており、同じく庵の景の左部に相当するものと思われる。

さて、六枚の断片の内容は右のとおりである。以上の検討を基にして巻頭部の復原を考察したいのであるが、ここで、二つの物理的条件を考慮する必要がある。第一は断片間の焼失部分の大きさである。現在、画面の上下には波線状の焼痕があるが、これは巻末に近づくにつれて次第に小さくなるものである。そこで、断片を配列する場合には、その間にできる焼痕の大きさが前後のそれと調和する大きさになるよ

うに考慮すべきである。第二は紙継の問題である。六枚の断片の中では、第8・11片に紙継がある。第一話においては、画面が連続する料紙は後ろより十枚目までを数えることができるが、この十枚目の料紙（第13・14片に相当）は長さ四九・六センチである。本絵巻の料紙の長さの平均は約五一センチであるから、これは約一・六センチ短いことになる。従って第8・11片にある紙継は、後ろより第9紙目と第10紙目の紙継から計って、五一センチの倍数の位置に近いところに置かれなければならないことになる。

では、画面が辛うじて連続しはじめる第13片を基に、これより右に描かれていた画面を推定する方法で、復原を試みることにする（図3の1・2・3参照）。

第13片はⅠの庵の景の発端部である。しかし、右上に焼け残る松の木と遠山の輪郭線の左端は、Ⅰ～Ⅳの遠景の最後と同じ表現であり、この右にもう一つの庵の景が展開することを予想させる。断片の中で庵の景の左部に相当するものは第12・21片の二枚である。後者は、遠山の輪郭線が断片内で終結しているので、ここには不適当である。前者には可能性があるので、焼痕の大きさに留意しながら、これを第13片の右に置くと、その間には二・五センチの開きができる。第13片を含む料紙は平均より約一・六センチ短いのであるから、この料紙の右の紙継は第12片との開きの間に想定されることになり、二つの物理的条件は充足される。

第12片の右には、前述の如く柴の庵があることが予想されるが、これに相当するものは断片の中にはないので、第12片の形を借りて断片一枚分の空白をおくことにする（これをXとする）。ここで画面は途切れるが、さらに推論を重ねるならば、Xの右には踞木があることが求められるとともに、紙継があることが予想される。この条件に適合するのは第8片である。

ところが、第8片が庵の景の左端と右端の要素を併せ持つことは、前述の通りである。従って、この右にもまた庵の景が展開することが予想される。そこで、第21片を置き、松の表現に注目してみると、両片の松はゆるやかな弧線を描いて並び、そのつながりは自然である。この二片の連続性を否定する要素は何もないので、推論を進めると、次には再び柴の庵があることが予想される。第12片の右と同様に、ここには第21片の形を借りて断片一枚分の空白をおくことにする（これをYとする）。第8片の次の紙継はこの空白の中に想定される。次には踞木の部分が予想されるので、残る三枚の中から第9片を選んで置くことにする。

さて、第9片については、先に、この右方にも別の風景描写があるらしいことを指摘し、これをひとまず粉河への導入部であると考えておいたが、ここで試しに第11片を置いてみると、Ⅳとこれに続く風景（図1）に近似した構図が出来ることに気付く。第9片の踞木の右にもう一本の木があると仮定するならば、その先端はちょうど第11片の

左端下方の枝先に一致するであろう。また、第9片の土手の向こうに見える線は、第11片左端の五徳と枝先の間にわずかに見える線に続いて、一つの丘を形成するものと看做すこともできるだろう。ただし、第11片に描かれている丘の向こうの流水や画面下方の小木は、Ⅳの前にはないのであるが、本絵巻の他の反復表現に比較するならば、この程度の変更あるいは相違は許容され得るであろう。なお、第11片には紙継があるが、Yに想定した紙継の次のものと看做して不都合はない。

このように考えてくると、残るのは第10片である。これも粉河への導入部の風景に相当すると考えられるので、第11片の右に置いてみよう。ここで、第10・11片が形成する丘はⅣの前のそれよりも短いが、[11] もし、この間に断片もう一枚分の画面を想定するならば、第10片には紙継が求められることになるので、この想定は不適当である。

以上の復原案をまとめると、前より第10・11・9・Y・21・8・X・12片という順序に並び、第13片以降に続くことになる。ここで料紙数について考えると、この復原部分は四枚から成る。また、第2・3片は少なくとも一枚分の幅を持ち、さらにこの前後にも風景が続くものと予想される。第4～7片は三枚にわたっている。このほか、巻頭にあったであろう詞書や現存する白紙の第1片を考慮して、第13片以降の十枚に加えると、第一話全体は二十枚前後の料紙で構成されていたと推定される。[12]

さて、右の復原案は、第8・9・12・21片の図様が、もとはⅠ～Ⅵの庵の景と同じような構成を持つ画面の一部であったという大前提に立って進めてきたものである。しかし、ここには何ら確実なるものはなく、結果としては、単に一つの可能性を示し得たに過ぎない。特に、X・Yと仮称した失われた部分が、ともに、最も重要な柴の庵そのものが描かれるべき箇所であることは、右の案に疑念を抱かせるかもしれない。だが、密度の高い反復表現を基調とする本絵巻の構成を見るならば、六回もくり返される庵の景との関連を無視して、これらの断片を考えることはできないはずである。従って第13片より前に、少なくとも現存する踞木の数だけの、あるいは、萩の咲き乱れる土手と松の並ぶ遠山の数だけの庵の景があったと推定することは誤りではないであろう。そうであるならば、右の案は、現状で考えられる組合わせの中では、最も適当なものであるように思われる。

なお、復原案によって新たに構成された庵の景の長さは、[13] 前者が約八六センチ（松並木を除外して遠山の輪郭線の左端までとすると約六六センチ）、後者が約七一センチである。第一話の庵の景の長さは、Ⅰが約七四センチ、Ⅱが約七一センチ、Ⅲが約九九センチ（松並木を除外すると約七四センチ）である。松並木の特に長く描かれる部分を除けば、五つの景はほぼ相似た長さになることを付記しておく。

## おわりに

さて、復原案は縁起の内容との関連において考察されるべきものであるが、右のように仮定した場合、現状では不明となっている巻頭部については、何が考えられるであろうか。

これまで、最も大きな問題とされてきたのは、仁範の漢文縁起（資料(1)）では、猟師が放光所を発見し、柴の庵を造立した後に童行者の訪問があるという展開をとるのに対し、現状の画面では、童行者の訪問の後に、庵を建てたばかりと思われる場面（庵Ⅰの景）が来ることであった。庵Ⅰを去る三人の男の中で、猟師と思われる左の男は斧をかついでおり、庵を建て終わって家路につくところと考えられるからである。ところが、これの次に現れる第二段の庵Ⅱの中には、既に千手観音像が出現しているのであるから、その前にある扉を閉じた庵Ⅰの中には、童行者が籠っていると考えるべきであろう。従って、現状の画面は仁範縁起からは説明されにくい。そこで、復原した画面についても、仁範縁起を離れて考える必要があろう。

復原した部分から第15片までには、庵の景が三回連続することになるが、まず注目されるのは、第11片の左端にある五徳である。これは、完成した庵Ⅱ・Ⅲの中に置かれている五徳と同じものと考えられるが、そうであるならば、Yにおいては、庵はまだ完成していないが、建設の準備をしているような場面が想像されるだろう。では、次のXでは庵は完成しているのであろうか。第9片では木立ちの根本や土手まで描かれているが、第8片では霞がかかり、この二片はかなり表現を変えている。また、第21片から第8片にかけては間を広く取り、遠景にも松並木を長く連らねて、ここにおける場面転換の意識が強いことを予測させる。XにはYとは異なる状況があるように思われる。さらに、第12片の右端にある木材の端に注目するならば、これは、Ⅰ～Ⅲから類推すると、庵を建てた残木であると思われるので、ここでは庵は既に完成していると考えることができるかもしれない。

右のように考えると、本絵巻の内容としては、仁範の縁起よりも後白河法皇蓮華王院小千手堂中尊供養願文の中に略述された縁起（資料(9)）の展開順序がふさわしいように思えてくる。つまり、童行者の訪問（第3片）の後、山中にはいり（第10・11片）、光耀木を伐って庵を建て（第9・Y・21片）、行者は庵の中にはいる（第8・X・12片）、そして猟師たちは庵を建てるのに用いた斧をかついで家路につく（第13片以降）というように、縁起の展開に一致した画面を想定することができるのである。もし、このように仮定するならば、本絵巻は後白河法皇のサロンに今一歩近付くことになり、大串純夫氏が本絵巻の製作背景に関して示唆された蓮華王院宝蔵との関係[14]も強められることになると思われる。

いささか推論に傾き過ぎたが、右のような可能性も含めて、本稿では、本絵巻の巻頭部の復原を考察した次第である。

## 註

(1) これまでに発表された本絵巻に関する論考のうち主なものは次のとおりである。梅津次郎「国宝粉河寺縁起絵巻」（『ミュージアム』第二七号、昭和二八年）、同「粉河寺縁起絵と吉備大臣入唐絵」（『日本絵巻物全集』第五巻、角川書店、昭和三七年）、大串純夫「図版要項　粉河寺縁起」（『美術研究』第一七一号、昭和二八年）、片野達郎「粉河寺縁起絵巻絵詞の研究――絵詞の文芸性について――」（『文芸研究』第二八号、昭和三三年）、亀田孜「粉河寺縁起絵巻綜考」（『大和文華』第二七号、昭和三三年）、清水義明「『粉河寺縁起』復原への一考察」（『仏教芸術』第八六号、昭和四七年）、河原由雄「『粉河寺縁起』の成立とその解釈をめぐる諸問題」（『日本絵巻大成』第五巻、中央公論社、昭和五二年）。

(2) 罹災の時期は不明であるが、大串純夫氏は種々の理由から天正十三年（一五八五）の豊臣秀吉の兵火によるものであろうと考証された（注2掲載論文）。これに対する異論は現在のところ出されていない。

(3) 注2掲載論文。

(4) 注2掲載梅津論文「粉河寺縁起絵と吉備大臣入唐絵」。

(5) 近藤喜博「絵巻物詞書研究の新史料」（『国華』第六九九号、昭和二五年）。なお、本書は『中世神仏説話』（『古典文庫』第三八冊、昭和二五年）に所収されている。

(6) 注2掲載大串論文および亀田論文。

(7) 「信貴山縁起絵巻」では、山崎長者の家が二回、命蓮の僧房が五回、清涼殿が二回ずつくり返し描かれているが、このうち命蓮の僧房一回を除くと、他はそれぞれほぼ同寸同角であり、共通の下敷をもとにして描かれたのではないかと推論されている。（谷口鉄雄「信貴山縁起絵巻に於ける同一構図の反復について」『清閑』第一九号、昭和一九年、『東洋美術論考』所収）

(8) 清水氏は注2掲載論文において、第21・22片について、画面が直接続かないこと、描写内容が類似していて第21片がまるで第22片の上に重なって置かれているように見えること、また、第19片の紙継と第22・23片間にある紙継との間が、第21片を引き抜けば、料紙一枚の平均法量になること（現状では七二・三センチ）などを考察して、第21片は完全断片であり、第20片は第22片に続くことを推論した。

(9) 注2掲載論文。

(10) 注2掲載清水論文。

(11) Ⅳの前の粉河への導入部分の風景が長いことについては、ここが長者の一行の道行の舞台となっていることが関係するように思われる。つまり、多くの人々を描くために、長い風景の設定が必要とされたのではないかと考えるわけである。同様に、この丘とⅣの土手との間が、同じ場所を描いていると考えられる第9片のそれよりも広いことについては、庵を指さしつつ、人々にその発見を告げる男の存在が注目される。このような人々の動きが認められない第一話においては、風景

はより簡略なものであったのかもしれない。

(12) 第二話の料紙の枚数は二十二枚（巻末の白紙二枚は含まない）であるから、この推論によれば、第一話と第二話はほぼ近い長さになる。二話の間で料紙数が一致する必然性はないが、一応の目安にはなるであろう。

(13) 庵の景の長さは、踞木のある木の右端から遠景の左端までを測定した。ただし、端が欠損しているものもあるから、正確な数値ではない。

(14) 注2掲載論文。

〔付　記〕

掲載した図版については、粉河寺ならびに京都国立博物館の金沢弘氏のお世話になりました。記して御礼申し上げます。

粉川への導入風景　　図１の１　粉河寺縁起絵巻　第二話第三段

庵　Ⅳ　の　景　　図１の２　同

紙継　　紙継

第23片　　第22片　　第20片　　第19片

庵Ⅱの景

図２　粉河寺縁起絵巻　第一話第二段

※

紙継　　紙継

第９片　　第11片　　第10片

※

図３の１　粉河寺縁起絵巻　巻頭部復原案

※
紙継

紙継

※

第12片

第８片

第21片

図３の２　同

※

後ろより第10紙

第15片

第14片

第13片

庵１の景　　図３の３　同　（第一話第１段）

第３片　　第２片

図４　粉河寺縁起絵巻　巻頭部復原案